

## 2023年度漢文夏期集中コース報告

大 竹 弘 子

### 1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、40週間の年間コースとは独立して漢文夏期集中コース（以下漢文コース）を設置しており、2023年6月23日（金）より7月13日（木）まで実施した。

漢文は年間コースでも、プログラム後期において「選択C」として週1回の授業を実施している。しかし、年間プログラムには参加できないが、研究上、漢文読解を必要としている大学院生、研究者等が想定されることから、日本人が書いた漢文を中心に、漢文の基本構造習得・読解に集中したコースを設けている。

2021年、2022年はZoomによるオンライン授業であったが、今年度は対面授業となり、期間・授業構成・授業時間・授業内容を以前の形式に戻した形での実施となった。（Zoomでの漢文コース内容については[大竹 \(2022\)](#)を参照）

### 2 漢文コースの目的と特徴

このコースは、対象として、主に資料として漢文、あるいは訓読文の文章を読むことが必要な歴史学、文学、人類学、宗教研究、美術史等の分野の大学院生、研究者を想定している。漢文読解の必要はあっても、漢文基礎の学習機会が少ないことから、基礎となる構文、旧漢字、漢文訓読体、候文などを集中的に学習し、その構造知識をもとに実際の文章を読み、和製漢文の文体・特徴に慣れ、以後の研究に資することを目的としている。

受講者には次の要件を満たすよう求めている。

1. 漢文読解能力を必要とする専門的または学術的分野への従事を目指していること
2. 上級レベルの日本語能力、および文語文法の知識を有すること
3. 日本語の基礎的文法・文型を十分に理解し、ひらがな、カタカナに加え、漢字約1000字以上の読み書きを既に習得していること

### 3 受講生の構成

今年度は博士課程五名、修士課程修了一名の六名が受講した。専門分野は、中世仏教哲学、近世美術、近世文学、近世・近代比較文学、近代文学で、研究において、漢文あるいは訓読文で書かれた資料の読解・理解を必要としている。研究対象はある程度固まっている

るが、読むべき資料は固まっておらず、漢文知識については差があり、既習、ある程度知識がある、知識はないと分かれていた。

## 4 教育活動の詳細

### 4-1 今年度の期間・授業時間

今年度は対面授業で一日四コマの構成、期間を三週間とし、月～金午前に構文の授業、月～木午後に読解の授業を実施することとした。

### 4-2 授業の枠組み

#### 4-2-1

第一日目、オリエンテーションでは、受講生の専門分野、漢文に関する知識を把握するとともに、このコースで扱う「漢文」とはどのようなものか、漢文訓読の際にはどのような提示法が用いられているかを説明した。

以降の時間割は、50分授業4コマの構成で、うち2コマを午前10時00分から午前11時50分までの間に行い、昼休みを挟んで2コマを午後1時30分から3時20分に行なった。

午前の2コマは第二週まで、漢文の構文構造を中心に、単純なものから複雑なものへの積み上げとともに多数の例文を自力で読み解いていく練習を重ねた。今年度は受講生の漢字知識、日本語知識に多少差があったことから、構造を説明する例文は返り点・送り仮名付きで提示し、練習文は、個々の知識に応じて、白文、返り点のみ、返り点・送り仮名を付したものを提示し、構文が複雑になるに従い全員返り点のみ付したものを用いた。こうすることで、説明例文で得た知識を応用していく力を付けた。

午後はまとまった文章の読解が中心で、著者、題名、歴史的背景などの情報を共有してから読み進める。第一週目は近代の文章を取り上げ、漢文訓読体、旧漢字に慣れることを目指した。二週目は、『論語』『日本外史』などからまとまった内容のある短い文章を選び、返り点、送り仮名を付けた形で、文脈のある文章の読解を行った。

第三週午前は「漢詩」、「候文」を扱い、実際の候文近世資料の読解も行った。第三週午後は、一次史料読解の経験として、また、様々な文体・内容の漢文に触れておくことを目指し、受講生の選んだ研究資料から一部分を選び、全員で読解を試みた。取り上げたのは、『莊子』齊物論、『笑府』より「饅頭」、滝沢馬琴『昔語質屋庫』跋文、中島湘烟『湘烟日記』四より詩抄、森鷗外『航西日記』より「明治十七年八月」、『明治形勢一斑』より「穢多非人廃止」「肉食之説」である。

#### 4-2-2

「漢字辞典・国語辞典に関する指導・情報検索方法の指導」の必要性に鑑み、今年度は電子辞書を持たない受講生に電子辞書を貸与し、使用法を指導しつつ辞書情報に対する知識を得させた。また、授業内でも、「今必要な情報を得るためどの辞書を引くか、情報を得るためにどのような検索方法があるか」について意識させ、どのように調べれば求めている情報にたどり着けるか判断できるよう指導した。受講生が実際にアクセスできる辞書等は形式・用語など様々で、それぞれの辞書から得られる情報を整理し用語に慣れるためである。具体的には、

- ① 漢字の基本情報にはどのようなものが提示されているか
- ② 字義はどのような階層性をもって並べられているか
- ③ 助字・句法・語法・日本語固有の使用法について、どこにどのような項目として提示されているか
- ④ 漢字辞典と国語辞典の提示情報の違いを理解し、求める情報はどちらにあるか
- ⑤ 漢字辞典・国語辞典で求める情報が得られない場合、どう情報を求めるか

以上の点を中心に、全員で同じ漢字・語彙を調べながら確認させた。

#### 4-2-3

教材はハードコピーの形で当日受講生に配布し、授業を受けながら書き込んでいく形式を取った。その上で授業後の復習・課題を行うためGoogleドライブによる教材シェアを行った。

#### 4-2-4

受講生の構文・読解のプロセスを共有するためGoogleドキュメントの形で受講生の個人ノートを設定して講師と共有し、授業中の個々の読み、また、課題とした練習文読み下しを書き込むこととした。授業中には講師がそれぞれの誤りをその場で指摘し、課題の場合は次の授業までに誤りが指摘された。受講生はそれぞれ指摘を見て訂正した。具体的には、受講生一人一人が自分のドキュメントファイルに読み下しなどを書き込む、講師は受講生の書き込んでいく内容を見て訂正すべき部分を赤字・コメントなどで指摘する、受講生は指摘された誤りを自分で訂正してみるという流れである。

### 5 受講生のコースに対する評価

コース終了時に受講生に対しGoogle form によるアンケートを行い、回答を得た。コース全体は高評価であったが、集中コースである故の「復習時間がない、期間がやや短い」などの意見が寄せられた。

この評価を受けて講師側は、集中コースということで時間的余裕が少なく、内容が非常に密になり、受講者によっては負担感を感じたのではと捉えている。一方、対面授業を行ったことで、「受講生の知識・理解に応じて、個別の課題を与え、個別に指導する」ことが可能となり、語彙力、漢字力、日本語力の個々の差を踏まえながらの指導がある程度できたのではと判断している。

## 6 おわりに

今年度は対面授業に戻ったこともあり、オンライン形式に比して個々の受講生に応じた指導ができたと感じられる。また、短期間に集中することで、基本的知識・構造をより効率的に学び練習することができるので、時間的負担感は期間を延ばすのではなく、これからも受講生の力に応じて教材の与え方を工夫することで、軽減が図れるのではと考えている。

受講生は全員熱心に課題に取り組み、それぞれ成果を上げた。オンラインでは難しかった互いの交流も十分でき、教室内で知識を共有しつつ、課題に取り組む姿は対面授業ならではのものであった。

(おおたけ ひろこ／2023年度漢文夏期集中コース主任)

## 参考文献

大竹弘子 (2022)「2022年度漢文夏期集中コース報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター教育研究年報』第11号 pp.93-96  
<[https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2022\\_Otake.pdf](https://www.iucjapan.org/pdf/nenpou2022_Otake.pdf)>